

の心にいつまでも新鮮な思い出として残った。セーヌ沿いの道を車のヘッドライトはプラタナスの街路樹をうつして走った。

(社会学部助教授)

来た道・往く道

山脇 秀 候



私は大正九年、福岡県久留米市草野町で生れた。六才の時父が急逝し、母は廿八才の若後家で九才の姉をかしらに五人の子供を連れて自分の親元へ帰った。私の弟は、小学校二年生で父の冥福を祈る為に九州日光と言われた草野専念寺江上秀静師に入門した。併し、寝小便の癖がなおらないので、小学校五年になった私が交替して弟子になった。長男の私を出家さす事は母親もためらったらしいが、生活苦を救う為に一人でも寺で面倒見て頂く事が我が家の生活を潤して呉れたらしい。私は小学校を卒業し、県立中学校に入学したが、事情があつて

二ヶ月で退学。高等科に入学、二年で卒業し、直ちに大本山善導寺宗学院に入学、三年で卒業し、友人は教師養成所に行ったが、私は明善中学の夜間部に入学。在学中、兵隊検査に甲種合格し、三年修了と同時に昭和十六年四月一日西部五十三部隊に入営、大東亜戦勃発と同時にビルマに派遣、昭和廿一年六月に復員。昭和廿二年三月佛教専門学校に入学、廿三年現在の滋賀県愛知郡湖東町来迎寺に養子として入寺した。

私が佛専に入学した頃は、語るも涙、聞くも涙、全く明日も知れない諸行無常の理を、学校そのものが如実に示していた。南寮と北寮があり、私は南寮の住人で便所の前に三人で住んでいた。腹のへつた寮生は、佛専近所の野良荒し、恵れた寮生は、田舎の寺より米を運んで喰べていた。我等の様な貧乏学生は何も喰うものなし、ミカン箱の勉強机の前に坐ると腹の虫がとてつもない声で泣き出す。辛抱していると横で恵れた学生が、一人前の小さな鍋で自分の分だけ炊いて、美味そうに喰っている。

横目でながめながら空即是色の般若哲学の勉強、色を越えて空(喰う)のため息許り。北寮の方から木を切る様な音がすると思っていいたら、雑炊をたく燃料に北寮廊下をはがして板を切る音、現在連合赤軍の暴力革命の先駆者は応しく我等佛専の先輩であつた。其の暴力団の親分が、現在大阪府下の教育長で頑張っている。昭和廿五年に佛専を卒業し、直ちに正大三年に編入、大学を出て大学院に残り修士課程を修了、昭和廿九年三月より現在に至る迄、一筋に浄教布宣の道に、此の道

より行く道なし、只此の道を往く。昨日も行き、今日も行く、又明日も其の同じ道を行くであらう。私の生甲斐を御蔭様と受取って、黙々と東奔西走の雲水行をつづけている。若い人から言われ、自分も未だ若いと思っていたがもう五十五年を数える様になった。三十五才で大学院を修了し二十年間此の道を歩いて来たが、其の道はテレビで見た「此の人此の道」ではないが全く泣けて来る様な事が多かった。併し、今考えて見ると其の時々に其の苦しみを堪えしのんで歩きつづけた自分の力に今は自分ながら驚いている。併し、それはやはりピルマに於ける生死を越えた五年間の貴重な体験が私の生き方に大きな見通しをつけて呉れたと思っている。雲南省の名もなき谷かげに。北ビルマの奥深きジャングルの中で、祖国の繁栄を祈りつづけながら散っていった英霊の御蔭様を今尚、忘れてはいない。

人生は山の峠道、上り下りがあつてこそ人の命に味がある。難儀も御蔭と噛みしめて峠々を越えて行く。万才布教だ、内容がない、オッチョコチョイだと言われて来た。併し私は万才とも思っていないし、内容がないとも思っていないし、落付きがないとも思っていない。愛媛県の小さな島の七十五才の男の人が私の手をしっかりとぎって「山脇さん私は現在迄いろんな説教を聞いて来たがこんなに感激した話は聞いた事がない」その一言で私は救われる。今日も明日も又生命ある限り、笑と涙を織りまぜて、念仏称名の布教の道を行く私である。

(昭和25年卒 来迎寺住職)

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。